

## ホルン元首相の歴史評価

### －ホルン・ジュラの功罪

ハンガリーの体制転換当時の外相で、体制転換後に首相を務めたホルン・ジュラが、この6月に81歳で他界した。7月8日に社会党主催の埋葬式が執行され、数千人の市民が参列した。オルバン首相を初め、歴代首相や大統領のほか、ゲンシャー元ドイツ外相など多数の政治家も国外から参列した。ホルン・ジュラは良い意味でも悪い意味でも、ハンガリーの戦後政治を体現した政治家である。埋葬式は体制転換に果たしたホルンの役割を称えることばで溢れていた。式を取り仕切った社会党のカトナ・ベーラは、これほどの国際的な評価を得ている政治家が、国内で国家叙勲を拒否されたことを指摘し、当事者だったシーヨム前大統領を眼前に批判した。

オルバン首相も出席するなか、1989年6月にホルンを外相に任命し、ハンガリー国境開放決定を行った当時のネーメット首相は参列しなかった。周知のように、この国境開放が契機となって1989年暮れの「ベルリンの壁」崩壊へと歴史が動いた。当時の外相ゲンシャーが、ホルンとともにネーメットの名を上げて、ハンガリーが果たした歴史的役割を称えたにもかかわらず、当のネーメットはバラトン湖畔の別荘に留まったままだった（本人は別荘からタクシーで墓地へ向かったが、渋滞がひどく、引き返したと釈明している）。

1989年7月、カーダール埋葬式が党本部で執行された時には、数万の市民がドナウ河沿岸道路に長蛇の列をなして参列した。当時、その光景に違和感を抱いたものだが、今回の賛辞一色のホルン埋葬式にも同じような違和感を抱いた。政治家の評価は政治家が考えるほど単純なものではない。

筆者は『ポスト社会主義の政治経済学』（2010年、日本評論社）の第6章「歴史評価と統治の正統性」のなかで、政治家ホルン・ジュラの評価を試みた。ハンガリー国内では他界した政治家への直接的批判を避けるのが慣習になっているが、今一度この問題を取り上げたい。

### ホルン・ジュラの功績

筆者はホルンと三度、個人的に会見したことがある。最初は1989年5月の内閣改造で外務大臣に任命された時に外務省大臣室で、二度目は名古屋万博招致の民間大使として欧州を回っていた知人を同伴して首相執務室で、三度目は1995年12月のホルン首相日本訪問に際して野村證券本社講堂で「ハンガリー投資セミナー」を組織し、当時の証券幹部だった田淵義久相談役と斉藤惇（現東京証券取引所社長）とともに面談した時だ。

懇意にしている映画監督コーシャ・フェレンツ議員が社会党幹部会員だったから、党首ホルンの言動や人となりを知っていた。日本の投資を歓迎し、日本の役割を高く評価していた。イデオロギーや政治信条を頑なに守るのではなく、状況や陳情内容に応じて柔軟に対応する政治家で、個人的な資産形成にあまり関心がなく、側近の蓄財にもきわめて寛容

だった。そういう資質が社会党の再建に役立った。カーダールと相通じるものがある。

オルバン首相の埋葬式への参列は意外だったが、社会党政権から第一次 FIDESZ オルバン政権に移行する際に、ホルンがオルバンを別荘に呼び、いさぎよく若い政治家に権力を託したという個人的な事情が働いている。若い有能な人材を抜擢した点も、ホルンの度量の現れである。国立銀行総裁に 41 歳のシュラーニィを、債務危機が表面化した 1995 年には 41 歳のボクロシュを大蔵大臣に任命した。社会党政権樹立以後のホルンには達観したところがあり、1994~5 年の債務危機に際して、ボクロシュの財政緊縮策の実行を受入れ、次期総選挙での敗北リスクを背負って、債務危機を乗り切る決断を下した。

こうした柔軟な対応は高く評価されるが、側近たちの経済的特権や利権の争奪を容認する脇の甘さが、後々の社会党政権へと引き継がれることになった。

### ホルンとネーメットの関係

ハンガリーにおける第 1 回自由選挙は 1990 年春に行われ、社会主義労働者党（ハンガリー共産党）を母体に再建された社会党は敗北を喫した。ネーメット首相は新設された EBRD（欧州復興銀行）副総裁へと転身し、ホルン外相は社会党再生に尽力することになった。

それに遡ること 10 ヶ月、1989 年夏、東ドイツからハンガリーへ流入した東独市民の取り扱いを巡って、ネーメット首相とホルン外相はドイツやオーストリア首脳と協議を続けた。ゴルバチョフ書記長から介入の意思がないことを確認したネーメット政権は、オーストリアとの国境開放を決断した。当時の西ドイツ首脳はこのハンガリーの決断にたいし、「恩をけっして忘れない」と語ったと伝えられる。確かに歴史的な重みをもった決断だったが、ハンガリー政府には東ドイツ市民を強制送還するという選択肢は残されていなかった。歴史の大きな奔流がハンガリーの若い政治家の決断を迫ったのだ。

ネーメットは EBRD 副総裁として陽の当たる道を歩み、10 年の任期を終えてハンガリーへ戻ったが、公職に就くことも事業を興すこともなく、若くして年金生活に入った。1990 年代半ばに社会党の首相候補や大統領候補として話題になることもあったが、人気があっても甘い汁だけを吸ってきた人物を社会党の頭に据えるほど、政治は甘くない。ホルン社会党が下野してからは、ネーメットは過去の人として、政治の舞台からフェイドアウトしてしまった。

ネーメットは経済大学助手から経済計画研究所に移動し、そこから党本部経済部に入ったエリート党官僚である。これにたいして、ホルンはソ連留学から戻り、党本部の外交畑を歩んできた典型的な中堅党官僚である。歳もホルンが 16 歳上で、焦眉の課題に取り組んだほんの一時期以外に、双方の気持ちが変わることはなかった。2007 年夏に国立ギャラリーで開催されたホルン生誕 75 年パーティにはゴルバチョフも参加したが、その席にネーメットはいなかった。

こうして、ホルンは体制転換における国境開放を主導した偉大な政治家として、その名声を独り占めすることになったのである。

## 二度にわたる国家叙勲の失敗

ドイツやオーストリアを初め国外から多数の顕彰を受けているホルンだが、ハンガリー国内では二度にわたって国家叙勲が拒否された。最初は2002年のメツジェシ社会党内閣当時、首相が叙勲申請を大統領府に送ったところ、マードル大統領が署名を渋ったために、ホルンが自発的に叙勲を辞退した。二度目はジュルチャーニイ首相（社会党）がホルン生誕75歳に際して国家叙勲を申請したが、ショーヨム大統領が最高裁判所に「無条件署名が必要な事項か否か」の判断を仰ぎ、当時の最高裁判所（長官は社会党が推薦した政治学者のビハリ・ミハーイ）は大統領の裁量を認める判断を下したことから、再び首相が申請を取り下げた。この時はホルン自身が改革派政治学者ビハリを指して、「誰のお陰で長官になったのか」と批判した。

それもこれも、ホルンは「1956年ハンガリー動乱」の評価を変えていない旧体制の政治家だからである。動乱当時、ホルンはソ連留学から戻ってきたばかりで、権力側から動乱鎮圧にあたった。以後、生涯にわたって、「ハンガリー動乱は反革命だった」という評価を変えなかった。社会主義労働者党が動乱を「反革命」から「革命」へと転換したのは、1989年の年初である。当時はまだ保守派の力が強く、カーダールから書記長を継いだグロースはこの変更に対抗で、ホルンも同様に反対だった。当時のホルンは改革派でなく、中間保守派に属していた。1988年から1989年末に展開されたハンガリーの体制転換を主導した立役者は、ネーメットやホルンではなく、ポジュガイ・イムレである。彼はカーダール政権末期から党中央に批判的なスタンスを貫き、最終的にグロース書記長を押しきり、動乱の評価を変えた。以後、ハンガリーでは1956年動乱は「人民蜂起による革命」となった。

保守派に属するホルンが外務大臣に抜擢された理由は分からないが、外交畑を歩いてきた党人で、比較的柔軟な姿勢を示していたからだと思われる。ネーメット自身も改革派というより、若手の党エリートとしてハンガリーの将来を託されたわけで、ネーメット首相就任時（1988年11月）にはまだ在野の反体制勢力から有能な人材を抜擢するという条件がなかった。そして、「相対的にまし」な選択としてホルンが外務大臣に抜擢され（1989年5月）、それから4ヶ月間の歴史的展開の中で、ホルンは「改革派政治家」として国際的に過大な評価を得ることになった。

ホルンはまたオーストリア国境の鉄条網を切断した政治家として知られているが、実はそれに遡る2ヶ月ほど前の1989年5月初めに、ポジュガイ国務大臣が鉄のカーテン切断の象徴的な行動を起こしニュースになった。これがハンガリーへの東独市民の大量脱出のきっかけになった。ホルン自身はこのポジュガイの行動に賛同しなかったと伝えられているが、外相に就任した後、東独からハンガリーに滞留する人々の数が多くなり、にっちもさっちも行かなくなった6月末に、オーストリア外相モックとともに、国境の鉄条網を切断するセレモニーを行った。その後、7月から8月に展開されたハンガリー政府とオーストリア、西ドイツ政府、さらにはゴルバチョフ書記長との協議を経て、ハンガリー政府は国境

開放の決断を行った。

この国境開放決定によって、ドイツではネーメット首相とホルン外相が体制転換を主導した英雄的政治家として買いかぶられることになった。他方、ポジュガイ・イムレは政治の転換を主導したにもかかわらず、政治の表舞台から消えてしまった。歴史は何とも皮肉なものである。世界史を見れば、このように漁夫の利を得て歴史に名を残した政治家や科学者は数知れない。

## ホルンが果たした負の役割

20世紀末に展開された旧社会主義国の体制転換は、経済学者が無邪気に「計画から市場への移行」と規定するような綺麗事ではない。そもそも旧体制経済は「計画経済」と呼ばれるものではなく、たんなる「戦時経済体制」にすぎなかった。だから、それが崩壊した後には何も残らず、体制転換はまさに「無から有を創る」に等しい社会転換だった。

もちろん、体制転換ですべてが無に帰したわけではない。ほとんどの国営大企業は清算されたが、多くの国家・党の不動産や国営商業銀行の金融資産が残されていた。体制転換から10年あるいは15年の歴史は、経済的に見れば、外資を巻き込んだこれら資産の分配（略奪）合戦である。このことは拙著で繰り返し明らかにしたところであるが、講壇経済学はこのような政治経済学的分析を嫌い、机上の空論を好む。経済学が社会理解に役立たない所以である。

国や地域によって、国家・党資産の再分配（略奪）のやり方に違いはあるが、すべての体制転換国で外国資本を巻き込んだ壮絶な争いが展開された。ほとんどの国と同様に、ハンガリーでも旧社会主義労働者党（共産党）人脈が、この争奪合戦で漁夫の利を得た。

ホルンが社会党再建の足場にしたのは、旧党本部人脈である。ホルンは社会主義労働者党本部の会計責任者だったマーティ・ラースローの手腕を高く評価し、社会党副党首に任命したが、マーティは社会党と個人の資産形成にホルンの権力を十二分に利用した。筆者はマーティとも個人的に何度か会食する機会があったが、体制転換直後の1991年前後から非常に羽振りが良かった。マーティはその後、ハンガリーにおける経済犯罪の多くにかかわっているサース・アンドラーシュ（現在、起訴中）とともに、Nador 95 KFT.の黒幕として、数々の国家資産詐取事件にかかわったが、表舞台に顔を出さないことで知られている。

ジュルチャーニ元首相の姑であるアプロー・ピロシュカは、カーダールと並んで政治局員をもっとも長く勤めたアプロー・アンタルの長女である。ホルンはピロシュカに要職を与えて、アプロー政治局員の恩に報いようとした。ピロシュカは行く先々の職場で、父の威を借りた権威主義的行動で問題を惹き起したが、その度にホルンは頭を悩ましながら、別の重要ポストを与えて処遇した。こうしてピロシュカは首相府官房責任者から MALEV 経営委員会委員長、商業銀行経営委員会委員長などを歴任しながら、旧アンタル邸の買取りや国営企業買取り資金の取得に、格安の銀行融資を出させるなどやり放題だった。ジュルチャーニが娘婿としてアンタル家に入り、政治の舞台に経ってからは、会社事務所を

社会党国会議員の集会所として提供し、「影の党本部」を機能させていた。

2002年、FIDESZから政権を奪還した社会党メツジェシ政権では、ピロシュカは30歳に満たない娘クララを首相府に送り込み、女婿のジュルチャーニイをスポーツ相に就任させた。メツジェシはピロシュカの大学時代のボーイフレンドで、メツジェシの諜報員としての過去をすべて知っている。ピロシュカの望み通り、ジュルチャーニイがメツジェシに代わり、社会党政権の首相となったが、社会党の公金横領の腐敗スキャンダルが大々的に暴露され、社会党は2010年の総選挙で惨敗を喫し、FIDESZに政権を明け渡した。

ハンガリーで旧体制人脈が脈々と生き続け、旧体制の政治家が国家資産や党資産の分配合戦で漁夫の利を得た背景には、旧党本部人脈を基盤にしたホルン・ジュラの政治支配がある。その意味で、ホルンが体制転換の経済過程に果たした役割は、けっして肯定的に語られるものではないし、「改革派政治家」という国際的な評価は国内事情を知らない外国メディアが作り上げた英雄物語である。